

「ESP を活用した実践講座 ビジネスプレゼンテーション実践講座」受講希望の皆様へ

長野県テクノ財団

## 1. はじめに

本実践講座への皆様のご参加を心から歓迎いたします！

日常的な会話やメールによるコミュニケーションなど、いろいろな場面で幅広く使える英語とその学習法を **EGP (English for General Purposes)**と呼ぶのに対し、具体的な目的を特定したコミュニケーションの場（工学系、医療系など）に適した英語とその学習法、および言語教育法の研究を総合して **ESP (English for Specific Purposes)**と呼びます。

本講座の開始当初、繰り返し直接ご指導<sup>[A~C]</sup>頂いた諸先生は、『**ESP は社会活動に参加するための英語である。**』（野口ジューディー先生）<sup>[1]</sup>、あるいは、『**ESP は、English for Survival Purposes である。**』（深山晶子先生）<sup>[1]</sup>とっておられます。

なぜ、これほど強く主張されるのでしょうか？ それは、めまぐるしく変容する国際社会で、私たちひとり一人が存在価値を確保するためには、活動の舞台となる社会集団（ESP では、discourse community: 専門家集団と呼びます）の中で、**英語により効果的に情報発信することが不可欠**だからです。専門家集団内で使用される「ことば」には、その集団独特の語彙・言い回し・表現方法があるため、general な英語では通用しないことが普通であり、『あらゆる分野で使われる英語を教えることのできる英語教員は、ネイティブ・スピーカーにも存在しない』（野口先生）という眼から鱗が落ちるような観察につながります。これは、「日本語のネイティブは誰でもエレクトロニクスの論文を書いたり、日本古典文学における言葉の神髄を教えることができる」という命題が成立しないのと同じです。ではどうしたら良いのでしょうか？ 答は、（先生がいないと覚悟せざるを得ないので）**「私たちひとり一人が、自分の所属する専門家集団で一生涯を通じて自律的に英語を学習する」**ことなのです。

学問分野としての ESP の使命は、私たちの学習を支える効率的な学びの方法を研究し、教育・普及させることにあります。

## 2. ESP 教育の特徴と手法

自律的な学習を継続的に行うには、学習者は分野（**genre: ジャンル**）ごとの言語の特徴を分析できる能力を備える必要があります。ESP ではこれを**ジャンル分析**と呼び、そのための手法を、『**「PAIL 分析目線」を育成し、「OCHA 思考法」を習得する。**』<sup>[A]</sup>という象徴的な 1 フレーズで表現します。

### 2.1 ジャンル分析の手順<sup>[2]</sup>

この手順は大きく言って、次の 6 ステップから成ります。

- ① ニーズ分析（Can-Do リスト作成）
- ② ジャンルの特定
- ③ 当該ジャンルのコーパス（言語データ）の収集
- ④ ムーブ（情報のかたまり）の特定
- ⑤ ムーブの流れを分析
- ⑥ ムーブごとに特徴的な語彙や文法の分析

#### How to learn about genres



## 2.2 PAIL 分析目線<sup>[3]</sup>

これは、ジャンル分析に際し次の 4 点に着目すべきことを説いています。

- **Purpose**: 文書・コミュニケーションの目的 (どんな目的で)
- **Audience**: 情報の受け手・読み手 (誰のために)
- **Information**: 伝えられている情報の内容 (どんな情報が)
- **Language features**: その文書・コミュニケーションが属するジャンルに特有の言語的な特徴 (ジャンルに合った言語が使われているか)

## 2.3 OCHA 思考法<sup>[3]</sup>

これは、次の 4 つの行動を繰り返す言語訓練を指します。

- **O**bserve: 文書 (言語素材) を観察し
- **C**lassify: 素材を分類してどのジャンルに属するか特定し
- **H**ypothesize: そのジャンルごとに **PAIL** 分析結果に基づいたコミュニケーション・ルールの仮説を立て
- **A**pply: 実際に自分の情報発信に応用して結果を出すこと。そして次のサイクルの **O**bserve に繋げること。



## 3. 「実践講座」へのシフト・アップ：プレゼンテーションの実践教育

本講座は、2007 年、文部科学省の現代 GP (Good Practice) の一つとして、上述のような ESP の学問的背景の学習からスタートしました。回を重ねるにつれ、受講者からは、**実際の情報発信に役立つ実践的な訓練の場**を含む講座への変容が求められるようになりました。情報発信には、メール、契約書、技術仕様書、等々さまざまな形態がありますが、なかでもプレゼンテーションとそのスキルは、現代のビジネス環境において必須の能力です。一方、英語によるプレゼンテーションの指導を、自信をもって行える指導者が皆さんの身近にどれほどいるでしょうか？ そこで、2012 年に長野地区でネイティブの先生としてご活躍中のスー先生、バーチ先生を講師にお迎えして、新たにプレゼンテーションの実践的な講座がスタートしました。これ以降今回まで多くの方がご指導を受け、実際の場でご活躍になっておられます。

## 4. テクニカル・プレゼンテーション指導の難しさ

その後、今日までの間、プレゼンテーションの素材として受講者に頻繁に取り上げられたのは、会社案内や製品紹介でした。今回はこれに加えて技術分野のプレゼンテーションも取り上げることにしました。

会社案内は、スタイルに一定のパターンがあり、指導は比較的行きやすいことが観察できました。一方、製品紹介においては、話題が技術的詳細に触れるようになると、ネイティブの先生であっても、たちどころに指導が困難となる場面もありました。まさに ESP が必要な局面であり、冒頭の「眼から鱗が落ちる観察」の証左でもあります。

このような講座開催側ならびに指導側の経験・学習に基づき、2019 年度の講座では、ゲストプレゼンターをお迎えして、「技術分野での実践経験をもつノン・ネイティブ (日本人) による、経験を重視した話題の提供とデモンストレーション」を追加することとしました。

更に野心的な試みとして、Session 2 のデモンストレーションでは、会社案内のように一方的に情報を提供するプレゼンテーションではなく、ある種の技術的交渉案件を含むような複雑な例を取り扱うことを考えています。受講者の理解を助けるため、Session 1 の最後と Session 2 の冒頭では、日本語による背景の説明があります。

また、デモンストレーション終了後は、日本語による追加説明、質疑応答を予定しています。

個別指導の課題設定については、初日の Session1 でスー先生とバーチ先生より説明していただきます。

本講座が皆様の ESP に対する理解と興味を深め、生涯に渡る学習のきっかけとなれば、望外の喜びとするところです。

海外展開に携わる方や英語によるプレゼンテーションの経験・チャンスが少ない皆様の積極的なご参加をお待ちしております！

長野県テクノ財団 ESP 講座 関係者一同

●一般参考文献

- [1] ESP 的バイリンガルを目指して 大学英語教育の再定義 2009 年、[2] ESP を基盤とした医学英語教育 笹島茂著 (page 7-8) 2004 年、  
[3] 研究論文 ジャンル分析に基づいた ESP アプローチの実践 深山晶子著 2007 年

●当財団主催の講座にて配布した資料

- [A] 「ESP で仕事」のための英語をマスターする方法 深山晶子著 2009 年、[B] 「ESP で仕事」のための英語をマスターする方法講座 深山晶子著  
2010 年、[C] 「What can ESP do ?」 野口ジュディー 2018 年

●インターネット・リソース

- ①野口先生の科学英語コラム第 1 回:「英語をマスターするコツは『ジャンル』にある」 <https://www.editage.jp/insights/noguchi-judy-column-01>  
②深山先生文献 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/2000/39/2000\\_71/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/2000/39/2000_71/_pdf/-char/ja)